

社会的な見方・考え方を育成する中学校社会科における学習指導の工夫

梶原 尚大(22014)

1. はじめに

現行中学校学習指導要領の社会科目標には、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」¹⁾の育成が示されている。つまり、社会的な見方・考え方を働かせることは、社会科の究極的なねらいである公民としての資質・能力を育成するために不可欠なものとなり、思考力、判断力、表現力等の育成に重要な役割を果たすものとなる。

詳細にみると、社会的な見方・考え方は、「課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法」¹⁾であり、社会的な見方・考え方を働かせることは、「社会科、地理歴史科、公民科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成はもとより、生きて働く知識の習得に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することから、見方・考え方は、資質・能力全体に関わるもの」¹⁾と説明されている。そして、社会的な見方・考え方を働かせるためには、単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」の設定が必要となり、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする学習を一層充実させることに繋がる。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、質の高い社会的な見方・考え方を育成するために中学校社会科における授業構成や実践を行い、学習において各々が問いや振り返りに対して、より専門的な語句を用いて、高度に見方・考え方を働かせて考えることができる生徒を育成することを目的とする。そのために着目する観点は、授業の組み立て

(1時間の導入・展開・まとめ)や、見方・考え方の視点を組み入れた具体的な発問や資料提示の工夫とする。導入での発問から、展開部分での主発問や副発問に見方・考え方の視点を入れて考えさせ、その際、資料をどのようにして活用するのか、まとめの振り返りをどのように扱うのかといった1時間の授業の流れやあり方について追究していく。

3. 研究方法

第一に、授業観察などによる生徒の社会科の知識の定着率や関心・意欲等を把握する。第二に、見方・考え方の評価の観点の設定や、課題設定と発問を検討、模索し、授業実践、分析を行う。その際に、学習指導要領による見方・考え方となる分野ごとの視点を問いや資料に組み込む。第三に、ワークシートに見方・考え方を働かせて記述できているか、こちらがあらかじめ設定した評価の観点と照らし合わせて確認する。評価の観点は、問いに含まれている見方・考え方の視点に沿った内容の記述があるかどうかで判断する。見方・考え方の視点を使ってどれだけ記述できているかを、初回の実践の記述と比較し、成長率を図る。初回の授業よりも見方・考え方の視点を取り入れて具体的に記述ができていれば成果があったと考える。実践は、地理的分野と歴史的分野で行った。

4. 研究成果

大杉・石上(令和3年)²⁾は、歴史的思考力を育成するために、歴史的な見方・考え方を働かせる場面を単元に設定し、歴史的思考力の育成を目指すことを行った。そのために、課題把握、課題追究、課題解決の3段階の構造的整理が重要になることが確かめられた。小山(令和4年)³⁾は、「地理的な見方・考え方」を働かせて社会に見られる課題を把握し、客観的な視点に基づいて、各々が根拠を持って自分の考えをまとめることができる力(選択・判断する力)を育成することを目的とし

ている。単元全体を見通しながら、流れを意識して見方・考え方の視点を入れていく必要がある。従って、単元ごとの学習課題だけでなく、資料や問いの中に見方・考え方の視点や概念を取り入れ、問いの連なりを意識した授業展開が必要になると考える。また、振り返りを行うことで見方・考え方の育成を促進できることから、振り返りの際にも見方・考え方の視点を生徒に活用させて記述することが必要になると考える。国立政策研究所における指導案においても、問いに見方・考え方の視点が含まれているものが少なく、どの視点を使うかが示されておらず、単元における最適な見方・考え方の視点が明確になっていない。従って、見方・考え方の視点を問いや資料の中に組み入れることでより見方・考え方を育成できると考える。

歴史的分野において社会的な見方・考え方の視点を問いや資料の中に組み入れて授業実践を行い、見方・考え方を働かせているか評価の観点のもとに、生徒がどの程度、見方・考え方を働かせて記述することができたか分析した。

表1 見方・考え方の視点を生かした考察や構想に向かう「問い」:2022年9月実践

①なぜ藤原氏が大きな権力を持つことができたのだろう。「事象相互のつながりに関わる視点:原因」
②藤原氏はどのようにして政治の実権を握ったのだろう。「事象相互のつながりに関わる視点:原因と結果」

表2 見方・考え方を働かせているか評価の観点

①天皇家と藤原氏との関わり(親戚になったこと)に触れていることの記述(原因)
②天皇家と親戚関係であったこと、天皇と二親等関係であったこと、祖父として権力をふるった等の記述(原因と結果)

①娘を天皇の后にすることで天皇と密接な関係となったから。:生徒Aの記述

生徒Aは、天皇家と藤原氏との関わりを、系図資料から読み取り、天皇家と親戚関係になったことについて考察している。ここでは、「事象相互のつながりに関わる視点:原因」に着目していることが見て取れる。

②娘を天皇の嫁にさせ、娘に子どもを産ませて天皇の家族になり、実権を握りやすくなった。:生徒Bの記述

生徒Bは、①の問いを踏まえたうえで天皇と親戚関係である点と、摂関政治によって裏から政治を操ったと

いう点について触れて考察している。ここでは、「事象相互のつながりに関わる視点:原因と結果」に着目していることが見て取れる。

表3 見方・考え方の視点を生かした考察や構想に向かう「問い」:2023年1月実践

③足利尊氏が後醍醐天皇を攻めた理由は何だろう。「事象相互のつながりに関わる視点:原因」
④鎌倉幕府の仕組みと室町幕府の仕組みの「共通点」や「違い」はどのようなものがあるだろう。「諸事象の比較に関わる視点:類似,差異」

表4 見方・考え方を働かせているか評価の観点

③武士たちの政治を否定されて、武士たちの不満が高まっていたこと、貴族の政治を重視していたからということ、建武の新政によって世の中が混乱していた等の記述(原因)
④鎌倉幕府では、将軍の補佐役が「執権」だったが、室町幕府では「管領」になっているということ、政所・侍所は、鎌倉幕府の時と役割が同じであること、六波羅探題が鎌倉府になっている等の記述(類似,差異)

③今まで、武士の政治だったはずが、貴族・天皇中心の政治になり、武士たちが不満に思ったから。また、貴族・天皇中心の政治になり、世の中が乱れていったから。:生徒Cの記述

生徒Cは、今までの武士の政治が後醍醐天皇により、貴族や天皇中心の政治になり、武士たちが不満に思ったからという「原因」、や今までの時代の中心が武士だったことも捉え「年代」、という視点で捉え考察している。さらに、二条河原落書から、後醍醐天皇の政治によって世の中が乱れていたことにも着目し、武士側の立場だけでなく、民衆の立場からの「原因」の視点からも考察している。評価の観点からも、武士たちの不満や、貴族中心の政治で、世の中が乱れていたという記述があるため、見方・考え方を働かせて考察できていると考える。従って、ここでは、「事象相互のつながりに関わる視点:原因」に着目していることが見て取れる。また、「時系列に関わる視点:年代」にも着目できている。

④執権、評定衆が管領に変わった。また、六波羅探題が鎌倉府に変わった。他はほとんど変わっていない。:生徒Dの記述

生徒Dは、鎌倉時代にはあった「執権」が室町幕府では「管領」に変わっていること、六波羅探題が鎌倉府に変わっているといった、「差異」に焦点を当てて考察している。また、他の部分(政所や侍所)は変わっていないという、「類似」についても考察している。従って、こ

では、「諸事象の比較に関わる視点:類似, 差異」に着目していることが見て取れる。

歴史的分野において、見方・考え方の視点を取り入れた発問や資料提示の工夫を繰り返し行うことで、9月に行った実践よりも、特に見方・考え方の視点をより多く組み入れた授業展開の1月に行った実践の方が、見方・考え方の視点を活用できている生徒数が増えたことが確認できた。(表5参照)扱った単元においても、1月の内容の方が学習する難易度が高く、難易度の高い学習で、より見方・考え方を働かせることができていことから、成果があったと考える。

表5 実践記録

実践日	見方・考え方の視点	活用人数
2022年9月 対象:71人	①:原因	25人(31%)
	②:原因と結果	10人(14%)
2023年1月 対象:70人	③:原因	42人(60%)
	④:類似, 差異	41人(58%)

次に、地理的・分野において見方・考え方の視点を取り入れた発問や評価の観点、生徒の記述を示すと、以下の通りになる。

表6 地理的な見方・考え方の視点を生かした考察や構想に向かう「問い」2023年9月実践

①' 資料から、サヘルに住居の特徴は何だろう。「場所に関わる視点:自然的特色」
②' サヘルに暮らす人々について考えよう。「場所に関わる視点:自然的特色」
③' 砂漠化することで自然などにどのような影響があるだろう。「人間と自然の相互依存関係に関わる視点:環境の保全」

表7 見方・考え方を働かせているか評価の観点

①' レンガでできている, 土や粘土でできている等の記述(場所に関わる視点:自然的特色)
②' 丈が長く風通しの良い服を着ている, ひえやもちしなどの穀類を食べている, 村の人は日干しレンガ, 遊牧民はテントで暮らしている等の記述(場所に関わる視点:自然的特色)
③' 草木が枯れる, オアシスが消えて暮らせなくなる等の記述(人間と自然の相互依存関係に関わる視点:環境の保全)
振り返り:乾燥した地域の人々の暮らしの様子, 砂漠化が進行している様子や影響などの記述(場所に関わる視点)

①' 砂のような石っぽいもので作られている。雨が少なく乾燥しているからできる。:生徒Aの記述

生徒Aにおいては、「雨が少なく乾燥しているからできる」という記述をしている。乾燥帯の雨温図から、気候の特徴を読み取り、降水量が少ないから砂や石で造ら

れていると記述できたと考えられる。これらのことから、「場所に関わる視点:自然的特色」に着目していることが見て取れる。

②' 日差しが強いため, 風通しの良い服装で生活している。:生徒Aの記述

生徒Aは「日差しが強いため, 風通しの良い服装をしている」などの記述をしている。乾燥帯の強い日差しの特徴を踏まえて、なぜそのような服装をしているかを読み取ることができていると考えられる。これらのことから、乾燥帯の気候の様子を捉えて「場所に関わる視点:自然的特色」に着目していることが見て取れる。

③' 木が無くなって, 環境に良くない。牧草が無くなって, 遊牧をしている人も困る。羊やラクダの食べるものが無くなる。:生徒Bの記述

生徒Bは「オアシスや草木が無くなったり, 育たなくなったりしてしまう」などの記述がある他、暮らしにも影響を及ぼすという点に触れて考察し、記述をしている。従って、「人間と自然の相互依存関係に関わる視点:環境の保全」に着目していることが見て取れる。

振り返り:乾燥帯でも, 雨は少ないけど降るし, 植物もあるし, 生活できる条件がそろったところがあってすごいなと思った。しかし, 砂漠化が進み, 動物が暮らせる場所がなくなってしまいそうになっているので, 危険だと思った。:生徒Bの記述

「砂漠化が進み, 動物が暮らせる場所がなくなってしまいそうになっている」といった記述があることから、「場所に関わる視点」について着目して記述することができていることが見て取れる。特に、生徒Bや複数生徒は見方・考え方の視点を仕込ませた発問を繰り返し行うことによって、発問123に行くにつれ、高度に考えることができ、振り返り際には、乾燥帯での暮らしの様子や、砂漠化が進行している様子、そこからどのような影響が及ぼされるのかについて振り返って記述することができている。

表8 地理的な見方・考え方の視点を生かした考察や構想に向かう「問い」2023年12月実践

④' インドの主な農産物である「米」, 「小麦」, 「綿花」, 「茶」はどのような場所にあるだろう。降水量の関係からも考えてみよう。「位置や分布に関わる視点:傾向性」

⑤' インドのICT産業が発展した理由について, アメリカとインドの位置の関係から考えてみよう。「空間的相互作用に関わる視点:関係性」

表9 見方・考え方を働かせているか評価の観点

④' 降水量が多いところでは米や茶が栽培されているが、降水量が少ないところでは小麦や綿花の栽培が行われている。等の記述(位置や分布に関わる視点:傾向性)
⑤約半日の時差があることで、アメリカ合衆国の企業が仕事をしない夜の時間帯にインドでその仕事を引き継ぎ、24時間働くことができる。等の記述(空間的相互作用に関わる視点:関係性)
振り返り':インドでは、アメリカ合衆国との時差が約半日というメリットを生かして ICT 関連産業が発達した。等の記述(空間的相互作用に関わる視点)

④' 降水量が 1000 mm以上のところは米や茶がとれる。1000 mm以下のところは小麦や綿花がとれる。:生徒 A の記述

生徒 A においては、「降水量が 1000 mm以上のところは米や茶がとれる。1000 mm以下のところは小麦や綿花がとれる。」という記述をしている。降水量と農業地域の図から、降水量によって分布する作物が異なるということを読み取り、特定の作物が育つためには降水量が関係しているということに気づき記述できたと考えられる。これらのことから、「位置や分布に関わる視点:傾向性」に着目していることが見て取れる。

⑤インドが働いているとき、アメリカの方は休めて、アメリカが働いているときインドが休めるから、24時間ずっと ICT 産業を動かすことができる。:生徒 C の記述

生徒 C は、インドとアメリカの約半日の時差と位置の関係から、インドが昼の際はアメリカが夜ということに結び付け、その関係を生かしてインドとアメリカが ICT 産業を永続的に動かすことができるという点に沿いながら記述できている。これらのことから、「空間的相互作用に関わる視点:関係性」に着目していることが見て取れる。

振り返り':インドでは、生きるために必要な米や小麦などの食料を育てたり、アメリカと半日の時差を生かした企業戦略など、産業が発展していることがよくわかりました。:生徒 B の記述

生徒 B は、インドでの農業の特徴に加え、アメリカとの地理的位置や相互関係を生かした ICT 産業の発展についてについて記述できている。そのため、「空間的相互作用に関わる視点」で振り返ることができている。9月に行った実践よりも発問に対する記述や振り返りについて具体的に見方・考え方を働かせている生徒が増加した。要因としては、主発問だけでなく、副発問にも多く見方・考え方の視点を取り入れて授業を展開したことが考えられる。従って、見方・考え方の問いのレベルを上げ

ることや繰り返し行うことで子どもの見方・考え方が育成されるということが成果として得られた。(表10参照)

表10 実践記録

実践日	見方・考え方の視点	活用人数
2023年9月 対象:87人	①':場所	82人(94%)
	②':場所	9人(10%)
	③':人間と自然の相互依存関係	85人(97%)
	振り返り':場所	40人(45%)
2023年12月 対象:84人	④':位置や分布	41人(48%)
	⑤:空間的相互作用	69人(82%)
	振り返り':空間的相互作用	47人(55%)

5. 考察

見方・考え方を育成させるためには、同じ難易度のレベルの問いを複数ではなく、難しい問いに段階的に移行することでより効果があると考えられる。また、単元や授業によって見方・考え方の視点一つひとつが持つ特徴を指導者側が理解した上で、どのような問いの中に見方・考え方の視点を組み入れるかを明らかにする必要がある。その上で見方・考え方の視点を意識した授業を繰り返し行うことが見方・考え方を育成するには有効であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省:中学校 学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編, 株式会社東洋館出版社(平成30年3月31日)
- 2) 大杉 鏡康・石上 靖芳:中学校社会科における歴史的思考力の育成に関する検討—江戸時代の幕政改革に歴史的な見方・考え方を働かせる単元開発—, 静岡大学教育実践総合センター紀要 31 巻, pp.229-238(令和3年3月25日)
- 3) 小山 拓真:地理的な見方・考え方を働かせた選択・判断する力を育む中学校社会科単元開発—見方・考え方と公民としての資質・能力の関係性に着目して—, 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, pp.433-444(令和4年3月)
- 4) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター:「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 社会, 東洋館出版社, pp46-101(令和2年6月27日)

社会的な見方・考え方を育成する中学校社会科における学習指導の工夫

梶原 尚大(22014)

要旨 現行中学校学習指導要領の社会科目標には、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成が示されている。つまり、社会的な見方・考え方を働かせることは、社会科の究極的なねらいである公民としての資質・能力を育成するために不可欠なものとなり、思考力、判断力、表現力等の育成に重要な役割を果たすものとなる。そこで、質の高い社会的な見方・考え方を育成するために、発問や資料に見方・考え方の視点を取り入れた中学校社会科の実践を行い、問いや振り返りに対して高度に見方・考え方を働かせて考えることができる生徒を育成することを目的とした。その成果として、生徒が自ら高度に見方・考え方を働かせて学習に取り組む方法や手立てについて総合的にまとめた。

キーワード:授業観察, 実践, 検証

ユニット指導教員(◎ユニット長)

◎吉田剛,堀田幸義,佐々木孝徳